

「ふだんの会話の中に」 6月号
～「こころの扉」を少し開いてみませんか～

何気なく使われている言葉にふと疑問を感じたことはないですか。今月は、結婚記者会見から人権を考えてみたいと思います。場面は、芸能人のAさんとBさんの結婚記者会見で、リポーターのRさんがBさんにインタビューをしているところです。

R「このたびは、おめでとーござい
ます。Bさんは今後お仕事を続
けられますか？」
B「子どもが生まれたらしばらくお
休みするかもしれませんが、で
きるだけ続けたいと思っていま
す」
R「お子さんは何人くらい欲しいで
すか？」
B「Aは子どもが苦手ですが、私は
好きなので3人は欲しいですね」

R「Bさんの得意な料理を教えてください」
B「実は、私は料理が超苦手なんで
す。でも、Aがそれでもいいって
言ってくれたので」

(長崎県人権・同和对策課啓発資料より抜粋)

これを読んだとき、気になる点はいくつありましたか。また、Bさんの性別を男女どちらと捉えましたか。Bさんを女性と思って読んだ人が多いのではないのでしょうか。その判断のもとは何でしょうか。

リポーターが「(結婚したら)仕事を続けるかどうか」を尋ねたことについて「女性は結婚したら仕事を辞める」という前提が見えます。また、子どもに関する質問にも、結婚したら子どもを産むという決めつけもありそうです。Bさんが不妊治療をしている場合もあることを考える

とやや配慮に欠けます。得意料理の質問への返答から、Bさんも女性が料理をするものと受け止めていることがわかります。こうしてみるとこの会見には、リポーターや当事者の思い込みや決めつけが見て取れます。

私たちの普段の会話はどうでしょう。思い込みや決めつけに気付かず話していることもあるのではないのでしょうか。今一度、自分の言動を振り返ってみませんか。

